

かつてない激しい戦いとなった96年P.P.Gインディカー・ワールドシリーズのチャンピオン争いは、カリフォルニア州モントレーのラグナ・セカ・レースウェイで行われた最終戦、バンク・オブ・アメリカ200にまでもつれ込んだ。タイトルの可能性を持つのは3人。ポイントリーダーはシミール・バツサー（ターゲット/レイナード・ホンダ・チップ・ガナッシ・レーシング）で、2位がマイケル・アンドレッティ（Kマート・テクサコ/ローラ・フォードXD・ニューマン・ハース・レーシング）、3位はアル・アンサーJr.（マールボロ/ペンスキー・メルセデス・ベントン・ベンスキール・レーシング）であった。

この3人のなかでタイトル獲得経験のないのは、ポイントリーダーのバツサーだけだ。95年までの実績でいえば、アンドレッティとアンサーJr.が現役最多勝ドライバーであるのに対して、バツサーは勝ち星すら挙げたことがないドライバーだった。

しかし、優勝こそ一歩及ばずにいたが、バツサーは、参戦4年目の95年からシワジワと本領を発揮し始めており、ホンダ・エンジンを得た96年、ついにその才能を開花させたのだ。ホールボジションを4回獲得し、年間4勝を挙げたターゲット・チップ・ガナッシ・レーシングのバツサー。開幕戦のホームステッドでは、逆転で初優勝を遂げ、第3戦サーファーズ・パラダイスでは、揺るぎない自信を見せつけながら実に堂々としたホール・トゥ・ウインを飾り、その勢いを保った第4戦ロングビーチでは、「2位でポイント加算」と考えていた終盤土壇場に、トップを行くシル・ド・フェラン（ベンゾイル/レイナード・ホンダ・ホール・レーシング）がスロウダウン。バツサーは勝利を自らのものと引き寄せた。

一度はあきらめかけた王座 チーム全体で獲得した栄光

こうして開幕4戦で3勝を挙げたバツサーは、US500でも勝って大量リードを築き、冷静に、リラックスした雰囲気です。タイトルの道を歩んでいった。確かに、デトロイトでの第8戦でブラクティス中にクラッシュした頃から、バツサーの歯車は少しずつだが、狂い始めたように見えた。ドライバーは初タイトルを、心のどこかで意識していたらうし、クルーにも同様の緊

張はあったのだろう。セッティングでつまらないミスも犯すこともあった。

シーズン後半には、チームメートのアレックス・ザナルデイが一気に台頭してきて、逆転タイトルの可能性があるところまで追い上げてきた。同じイクイップメントを使うザナルデイがホールボジションを奪い、連戦フロントロウからスタート。動揺して不思議のない環境となっていたが、バツサーは最後まで自らの能力を信じ続けた。アンサーJr.に1ポイント差まで詰め寄られて迎えた第13戦ミッド・オハイオ。彼は、完全に独自のシヤシーセッティングをトライした。このレースではザナルデイが優勝し、バツサーは2位になったが、ノーポイントに終わったアンサーJr.に再びポイント差を突きつけることに成功したのは大きかった。

「常にマシンをいたわり、フィニッシュを目標することを、今年のテーマとしていた」とバツサー自身が振り返る。彼は自らにタイトル獲得のチャンスがあることを、シーズン開幕前のテストの時点から気づいていたのだ。そして、その自ら掲げたテーマを最後まで貫き通し、バツサーは全16戦中の15戦でポイントを獲得し、全レースを出場選手中唯一フィニッシュしたのだ。

シーズンも終盤になって2連勝したアンドレッティは、最終戦で逆転タイトルを狙える位置にまで復活し、「ヤツは最終戦まで、よく眠れないだろうな。こっちは優勝だけを狙って走ればいい」とプレッシャーをかけた。

バツサーは、「5位以内でフィニッシュすれば、ライバルの成績に関係なくタイトル決定」という条件下で最終戦を迎えた。そして、アンドレッティとアンサーJr.がシヤシーセッティングで苦戦するのを尻目に、予選を5位で終え、レースでも序盤からトップグループにすっとつつけ、4位でチェッカーフラッグを受けた。アンドレッティ、アンサーJr.ともに一発逆転に賭けて激しいアタックを見せたが、最後までハンドリングを向上させられず、苦しい戦いのまま最終戦を終えた。

念願の初タイトルを獲得したバツサーは、クールダウンラップで何度もコクピットから拳を突き上げ、地元カリフォルニアのファンと喜びを分かち合った。このレースではチームメートのザナルデイが優勝を飾り、彼ら二人は同じターゲットカラーの

レイナード・ホンダを、チームメンバーたちの待つビクトリーレーンへと乗りつけた。シートベルトをほどく間もなく、彼らは二人ともクルーたちにモミクチャにされた。

「6歳でレースを始めて以来、今日が最良の日となった。ずっと夢見てきたインディカーのチャンピオンになって、本当に嬉しい。これは、私だけの力で達成できた夢ではない。チップ・ガナッシ・レーシング、ホンダやファイアストン、そのほかにも我々のチームに関わってくれたたくさんの人たちがいて、彼らのハードワークがあって初めて獲得できたタイトルなんだ」とバツサーは語った。

「ポイント差が縮まったときは、タイトルは無理かも……と当然思ったこともある。しかし、一体自分は何ができるのか？を考えた。結局、「自分のできるベストの仕事をするしかないんだ」と」

バツサーはすべてのレースを終えてからこう語った。シーズン後半、延々と続いたプレッシャーを戦い抜き、タイトルを手中に収めたバツサー。彼は来年、さらにタフなドライバーとなっていることだろう。

THE FINAL
1996 SEASON

ジミー・バツサー最終戦でチャンピオン決定!

楽勝から一転「混戦」状態 最後の最後に得た「歓喜」



バツサー（中）がついに手にしたチャンピオンの座。やはり簡単にはたどり着けなかった

序盤戦を終えたときには、誰がこんな結末を予想していたらだろうか。逃げ切りたいジミー・バツサー、追うアル・アンサーJr.とマイケル・アンドレッティ。チャンピオン決定はついに最終戦にもつれ込んだ。

text & photographs by Masahiko Amano

